

ビルマ・世界最大の仏塔

シユエダゴン。パゴダ

撮影 樋口英夫 文 杉原孝彦



天空を突き刺す黄金のパゴダ



ここ数年、東南アジア地域に点在するパゴダを、いくつも見続けてきた。パゴダの原語は、いまも明らかではないが、スリランカではダゴバ、ビルマではゼーテイ、タイではプラ・チュタイなどと呼ばれ、日本では五重の塔などを意味し、仏塔を指す言葉だ。

どれもが熱心な仏教徒によって建立されたものばかりだった。飛行機で上空から眺める

と、東南アジア地域がいかに強大な仏教圏を形成しているかがすぐに理解できる。

空と交わる地平線の彼方まで見渡せる上空で、人の生活の気配を感じとるためには、まずパゴダを探すことだと認識するようになったのは、東南アジア地域の仏教に関心を持ちはじめたからだ。パゴダが確認できれば、そこに人が住み、周囲には集落がある。低空



飛行ならば、かすかながら人の動きも確認できる。空から眺めると、バゴダはその土地にへばりつき喜怒哀楽に満ちた生活をおくっている住民たちの求心力になっているように見える。集落のあるところ必ず、バゴダがある、と断言できる現実が、東南アジアの特質となっている。

長い時間の経過に耐えながら、無数のバゴダがそこに建ち続けているその東南アジア地域のなかで、もつとも印象深いのが、ビルマ(現ミャンマー)の首都ラングーン(現ヤンゴン)にあるシュエダゴン・バゴダだ。「シュエ」は黄金を、「ダゴン」はラングーンの名を意味する。

初めてシュエダゴン・バゴダを見たのは、夜だった。国連に自ら世界最貧国待遇の認定を要請しなければならぬほど、経済的に貧窮状態にあるビルマは電力事情が極めて悪く、首都ラングーンも太陽が沈むと闇に支配される。だがそんな状況にもかかわらず、強力なライトに下から照らし出されて、真っ暗闇の空を突き刺しているのがシュエダゴン・バゴダだ。

ここがビルマ仏教の中心なのだ、ここに来れば仏の慈悲を体感できるのだ、といわんばかりの強い意志と主張がほとばしっているよ



うな光景だった。一筋の明りに吸い寄せられるように集まった人たちのざわめきで、シュエダゴン・パゴダの周りは異様なほどのにぎやかさがあつた。

ラングーン市街の北にあるティンゴウタヤの丘の上に建つこのパゴダの高さは、現在九九メートルに達している。伝説によれば、早くに仏教を取り入れてきたことで知られるモン族の商人が瞑想中の釈迦に出会い食物を奉獻したところ、釈迦から八本の聖髪をもらい受け、この丘に安置したのが起源だとされる。初めは金、銀、銅など七種の材質からなる小さな仏塔にすぎなかったが、やがて歴代の国王が功德の証として増築を重ね、十五世紀の中頃にはすでに現在の高さになつてつたという。

高さでは、タイのナコン・パトムにあるプラ・パトム・チュディーの一六六メートルより低いものの、シュエダゴン・パゴダはまさにその名の通り、金色に輝く黄金のパゴダとして、またその立体的な広がりにおいて世界的なパゴダの一つであることには違いない。いまでも熱心な仏教徒たちが、功德として金箔を貼り続けている。



ひたすら祈

りを捧げる

ビルマの人々

仏具を扱う店などが両側にぎっしりと並ぶ
東西南北にある長い階段を登りきると、シュ
エダゴン・パゴダの基壇にたどり着く。ここに

出ると、そのきらびやかさに誰もが
驚かされるだろう。金、赤、青、黄な

ど、はては美しい原色に塗られ

た礼拝堂とともに、金色の大
小ささまざまなパゴダが、シユエ

ダゴン・パゴダの周囲に密集しているのだった。

どれもが強い熱帯の太陽に照らし出され
て、鋭い光を反射させている。街中の喧噪もこ
こまでは聞こえず、静寂の世界が広がる。地
上に出現した極楽浄土とは、ここを指すの
ではないだろうかと思わせるほどのきらびや
かさとともに静けさがある。礼拝堂や小パゴ
ダはいずれも、熱心な仏教徒たちによって建
立されたものばかりだ。

夜が明けるのを待ちかまえていたように、
大勢の人がやって来る。早朝から、相当なに
ぎわいにつつまれているのだった。出勤前に、
ここで瞑想を課している男たちがいる。手に
花を持ち、子どもを連れた女性たちがいる。
托鉢を済ませ、早々にここに来てきた僧
侶たちの姿も見える。誰もがここで自分の空









間を確保し、思い思いに祈りを捧げ、やがて瞑想へと自分を導く。それがしごく当然のように行なわれているのだった。

ビルマと同じ上座部仏教圏のタイやラオスなどでも早朝から祈りを捧げる人は多いが、ほとんどは寺院におもむき本堂に安置される仏像への祈りが中心となる。ところがこのシュエダン・パゴダでは、パゴダに手を合わせ、見上げ、ひざまずき、ひれ伏し、祈りとともに、やがて人は瞑想に入るのである。誰もが陶醉しきった表情を浮かべ、それは見る者にとつて、嫉妬さえおぼえさせるほどのものだった。

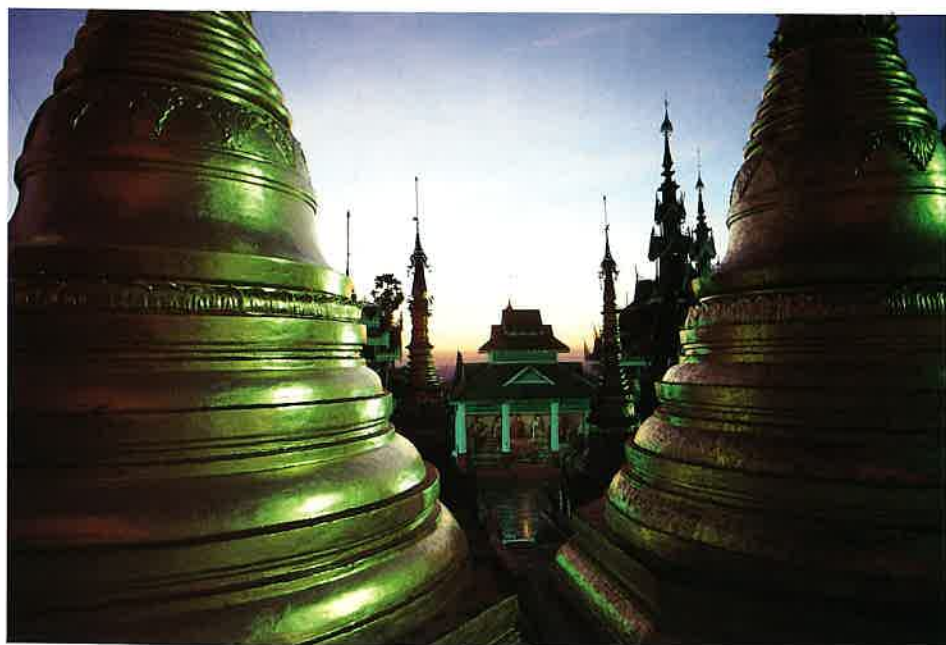
初めてビルマに入国したとき、当時許可された一週間という滞在期間すべてをシュエダゴン・パゴダ通いに費やした。朝・昼・晩というように一日三回、ここだけを訪れた。そのときここで見たのは、国民の八五％が仏教徒だとされるビルマの人々の、熱心すぎるほどの仏教への熱い思いと同時に、仏教がビルマ人の体にこびりついているといえるほどの定着ぶりだ。

ここ数年、著しい経済発展をとげるタイとは対照的に、ビルマは以前から外国人の入国を極力制限するとともに、独自の政策を維持してきた。また最近も、国民の民主化要求に

もかかわらず、軍部のクーデターで実権を掌握した軍事政権は民政移管を拒否し、その閉鎖性を強めている。

こうしたことから世界の発展から取り残され、タイの首都バンコクからわずか飛行機で一時間という距離にもかかわらず、ビルマに到着すると、意識の時間を数十年前に逆戻りさせなければならなくなる。今も街中を走るバスは、一九三〇年代にイギリスが持ち込んだとされるトラックを改造したものだ。以前、昭和初期の沖縄の街中を撮影した写真を見かけたことがあるが、現在のビルマは六五年以上も前の沖縄の光景と、それほど大差がない。このような諸々の政治、経済、社会的要因が重なり、ビルマでは仏教に救いを求めようとする動きがますます顕著になっているという指摘もある。祈りと瞑想が済めば、やがてシュエダゴン・パゴダは早朝とは異なった様相を見せはじめる。気に入った僧侶を見つけ、礼拝堂で時間の流れにまかせて談笑する人、涅槃仏の前で同じような姿で快眠にひたる人、はるばる辺境の地からやってきた少数民族の二団も混じり、世代も性別も越えてそれぞれの憩いの場所となる。





見上げ続けると首が痛くなる。パゴダの最上部には、四千とも五千ともいわれる寶石がちりばめられ、強烈な太陽の光を反射させている。そのすぐ真下には無数の鐸がつり下げられ、天空を流れる風によってかすかな金属音が地上に舞い降りてくる。そして夕方ともなれば再び瞑想に訪れる人でにぎわいを増し、夜がふけるまで人の気配は絶えることがない。



東南アジア各地に広まった南方上座部仏教はスリランカの大寺派の伝統を受け継いでいるが、ビルマへは十一世紀中ごろに伝えられ、以後現在まですたれたことがない。以来、その中心となってきたのがシュエダゴン・パゴダだ。シュエダゴン・パゴダはビルマの無数の仏教徒の祈りを集め、天空の仏陀に発信しているようにも見えるのだった。